

JKKレポート

REPORT

VOL.93 1991年6月20日

都市型集合住宅研究 6

ー複合機能および共同空間の配分についてー

研究の概要

1. 研究の目的 1
2. 研究の方法とレポートの構成 1

はじめに ー集合住宅研究の位置づけー

1. 研究の背景 3
2. 日本における従来の集合住宅計画のもつ問題点 ... 6
3. 最近のヨーロッパの集合住宅の動向 7
4. 研究の方法 8

第Ⅰ章 歴史的都市の複合的居住と集合住宅の形成

1. 歴史的都市の複合的都市居住 9
2. 集合住宅形成の2つの空間構成原理 12
3. 集住のための空間構造 18

第Ⅱ章 集合住宅事例の共用部分について

1. 共用空間の面積配分 23
2. 共用空間の用途 25

第Ⅲ章 集合住宅事例の外部への「しつらえ」

1. ゼロロット型の立面構成 27
2. 空間型の立面構成 29
3. 住民の表現手段としての立面構成 33
4. 閉鎖性と開放性 35

結論 ー今後の集合住宅計画の方向性ー 37

住環境研究所

〒101 東京都千代田区内神田2-16-11(内神田渋谷ビル)TEL03-3256-7574

第三章 集合住宅事例の外部への「しつらえ」

街並みや町の形成に各戸が参加することは、換言すれば外部を意識した「しつらえ」がされることであり、それは、立面のデザインといった単に物的要素の工夫のみが街並を形成することにはならない。デザインの、空間的、用途的にいづれを重要視するかは、その建築物の計画地を取り巻く、あらゆる環境により差異がある。それを的確に感じ取り、適合する手法を選択し創造することが計画者の役割となる。

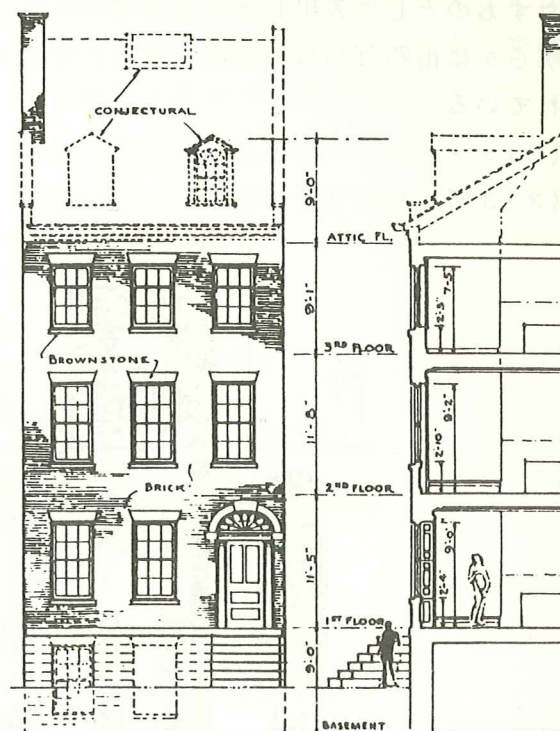
ここでは、外部に対しての「しつらえ」る行為がいかなる次元で考えられているかを事例的に整理を試みる。

1. ゼロロット型の立面構成（高密度対応）

① プライバシーの囲い込み

立面は各住戸街路に顔を向け街路空間の内側を形成し、貢献する役目を持つものであるが、同時に居住のための空間を囲い込み、内部のプライバシー及び安全性を確保する役目を持つ部分である。壁または、住戸と街路との間の空間はそういった要求が、都市ほど強く生じていると予想できる。ゼロロットの立面がそれらの条件を満たすためには幾つかの立面構成上の工夫を拾い出すことが可能である。

一つが、住戸のプライバシーを街路からの視線から守るために高低差である。サニーサイド、同潤会アパート、ヒルサイドテラス等に見られる手法である。これにより、低層部は窓をカーテン等で閉ざすことなく良好な採光環境を得ることが可能となる（ニューヨーク等の住宅地では半地下部分に機械室や倉庫が設けられている型が多くみられるが、地下室は特に容積率に算定されないという法規により、一般化したと考



8 Greenwich Street. New York, New York. 1807-1808.

図3-1 アメリカのローハウスの例

えられる）。(図3-1)

その他に、安藤忠雄の一連の建築に見られるように窓のない壁で街路と接して外部と完全に隔絶するような手法、光は透過するが視線は透過しないガラスブロックのような素材を使用した壁で接する手法のように建築的なものから、設けられている窓に波板、ブラインドウ、カーテン等で視線を遮ろうといったものまでである。

② 彫刻としての立面

立面は街路という公共へさらけ出される部分であり、種々のしつらえがなされる場である。街路側をしつらえるといった行為は西洋においても、日本においても手法は異なっても見られる行為である。

いくつかの構成上の法則または手法を読み取ることが可能である(図3-2)。

(1) 窓のスケールやデザインまたは配列を揃えることにより、壁の上に秩序が生じる。それらが単に内側の採光といった要求を満たすものとして表出しているのではなく、明らかに街路側からの視線を意図して配されている。

(2) シンメトリーの手法

(3) 3層4層の立面構成

元々宮殿のような建築物に使用された立面構成であるが、多層に積層する住戸群を利用し、同様な立面構成を形成する場合があります、小さなものの集合を使用して、より大きな概念の構築物を作ろうとするもの。

(4) 表面の装飾

付け柱、彫刻、オーダー等付随的に表面に取り付くもの。

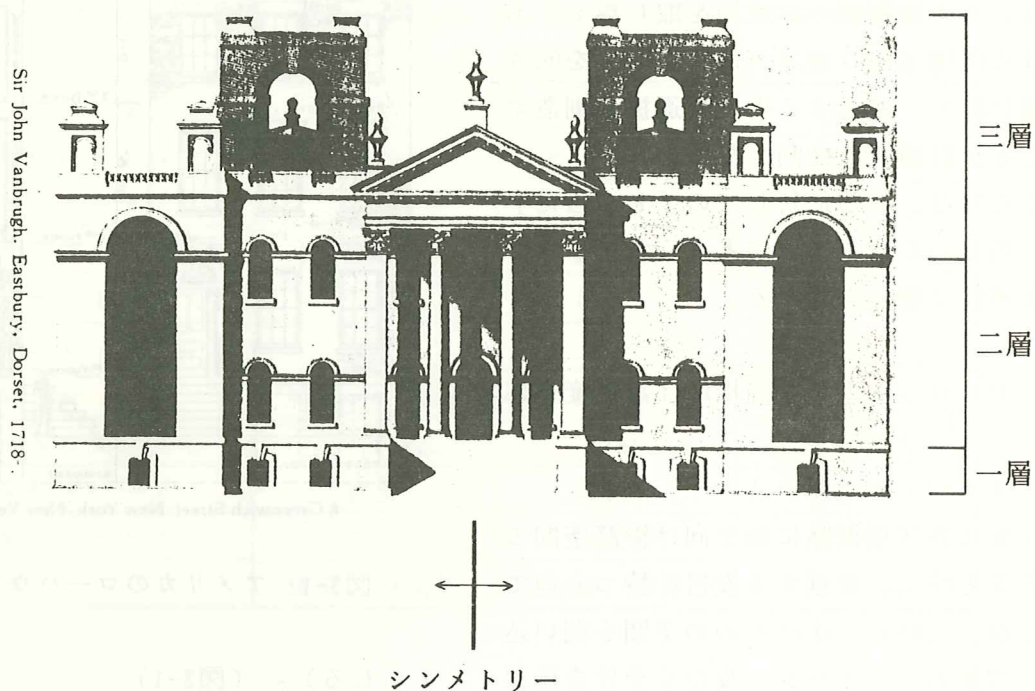


図3-2 立面の構成方法

2. 空間型立面構成

③空間の提供

同潤会アパート等に見られるが、街路からセットバックし、一般人が侵入しにくい
が、緑等を配し街路空間に視覚的、空間的
に寄与するものがある。可能性としては、

立面に凹凸があり、街路の平面形態の空間
に変化を与えるといた寄与のしかたから、
確保された空間に緑等をほどこし、視覚的
にも寄与するレベルが考えられる（図3-3）。

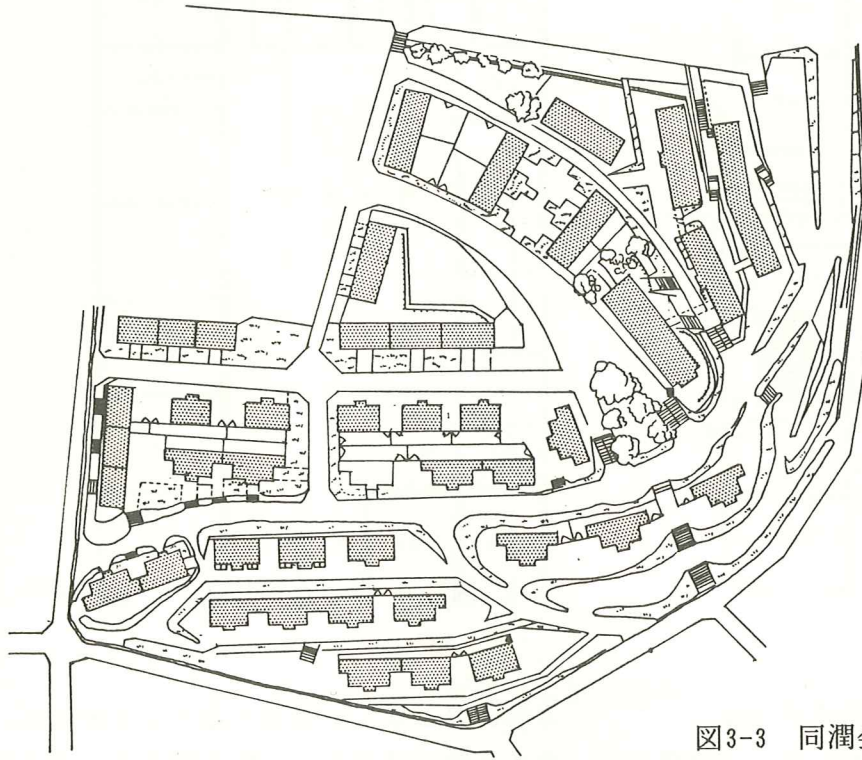


図3-3 同潤会渋谷アパート 1/2000

④街路の引き込み

ヒルサイドテラスは2種類の引き込み街
路が計画されており、一つは歩道に平行し
て、セミ・プライベートな街路がわずかに
アイレベルを変えながら性格付けており、

建物の中の動線と外部の動線との対応も視
覚的に考慮されている。もう一つがこれに
施設がまとわりつく形で計画されており、
両者共通り抜けの形式を取っている（図3-
4）。

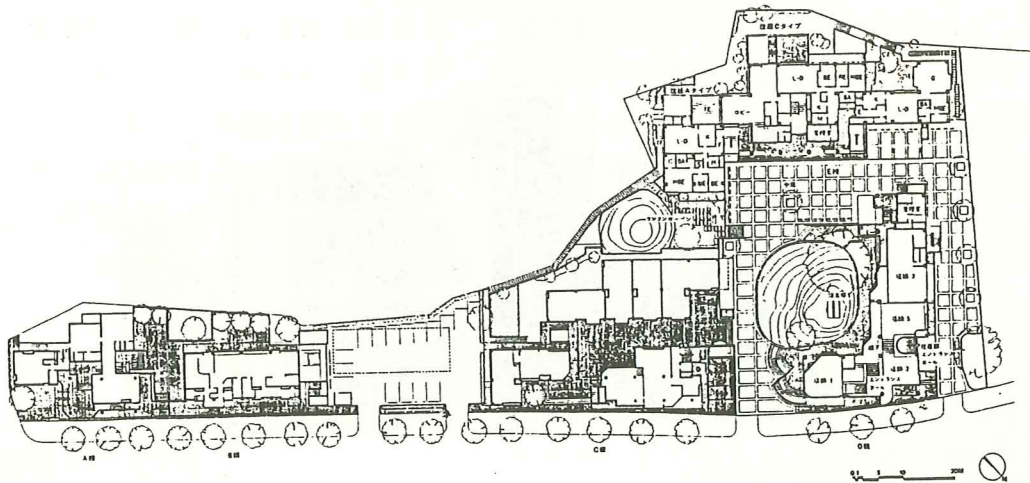


図3-4 代官山ヒルサイドテラス 1/1500

世田谷ビレッジでは、施設に囲まれた広場を有しており、広場が街路に開いた形態となっている。街路に開かれた空間は街路空間の開放感を高め、一般人に使用を許しているので、用途的にも貢献している（図3-5）。

引き込み街路は、通り抜け形式、高低差がある形式、商店などに施設をはりつかせる形式等の条件により、周辺の一般住民に対しての開放性に差が生じ、一律に扱えるものではない。

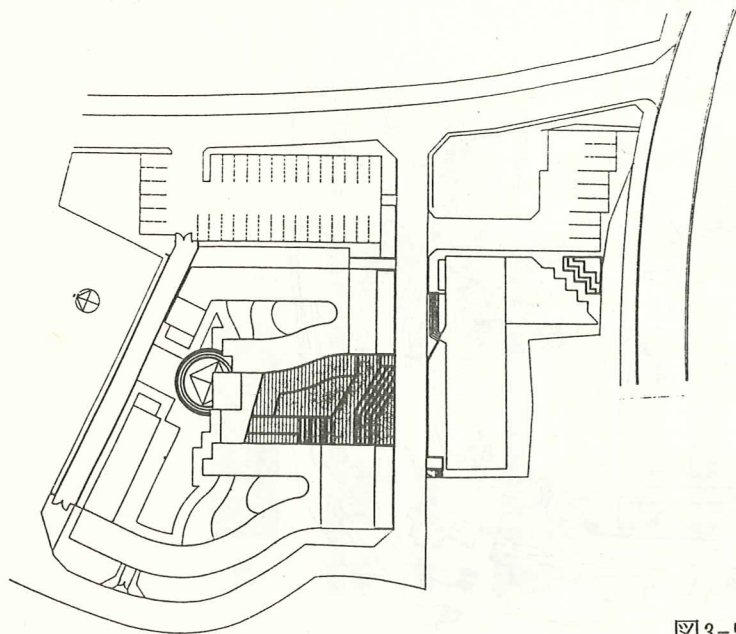


図3-5 世田谷ビレッジ 1/1500

⑤彫塑的な建築形態（極低密度対応）

彫刻的といっても、外部に対して異質な記号を発している彫刻と静かにその風景の中におさまっているものとがあらう。それは立地している場所の状況に応じて選ばれるであろうが、カーンの作品は後者にあたる。各戸の平面形態がそのまま外形に表現

され、壁と壁との隙間が窓として扱われ、全体の壁の構成が光と影の組み合わせの彫刻をつくり出している。最も象徴的なものにピラミッドが挙げられるが、風景の中に象徴性のあるものとして構築することも一つの外部に対しての「しつらえ」とできよう（図3-6）。

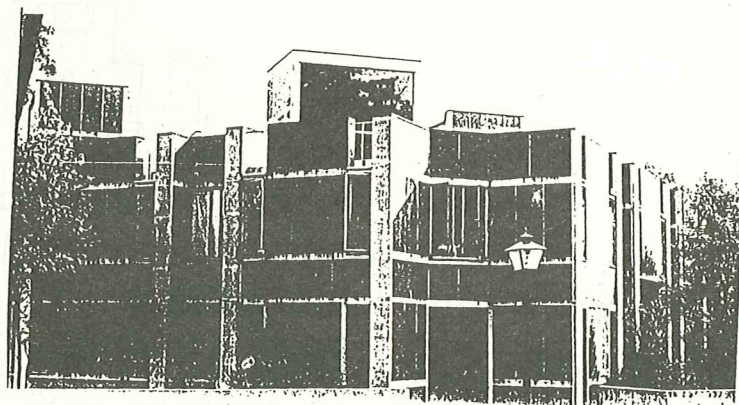


図3-6 ブリンモア・カレッジ（アメリカ）

⑥低層部の公共的施設（密度無関係）

オスティアに見られる低層部の商業施設である（図3-7）。それが一般人に利用できる外側に開いた用途を有していることは、人々が訪れるので前面の街路は公共性を帯びた空間となる。ヒルサイドテラスは通り

抜け型の引き込み街路に面して商業施設が配置されており、一般人が頻繁に利用する公共性を帯びた空間を形成することに成功している。また、近辺の居住者に供する用途であれば、それ自体、街に貢献する行為であるといえよう。

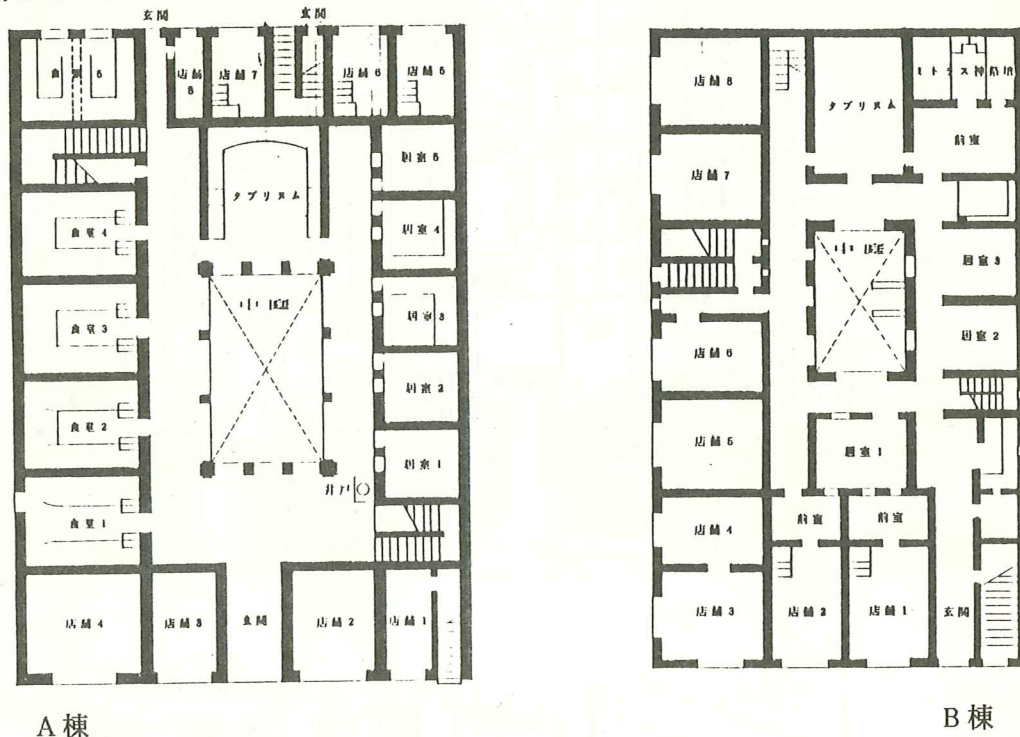


図3-7 オスティアの住宅低層部（1階） 1/500

⑦生活街路（密度無関係）

南北街路はサニーサイドの住宅の敷地の短辺を横切るいわば路地的な街路で、この街路に面して路上駐車をし、各住戸へアプローチするようになっており、同時に街路に面してキッチンが配置され、街路に面した住戸群による生活道路として仕上げられている。街路には立面は直接接しておらず、1間程セットバックし、小庭を介して街路と接している。以上の工夫により、キッチンに関連した作業、庭の手入れ、車の手入れに関連した作業等が街路側に露呈することとなり、コミュニティへのきっかけとなる互いの快適な干渉が生まれると推察できる（図3-8）。

⑧街路に開放した共有庭

サニーサイドの東西街路に対し、住戸群

はコの字に連なり共有庭を開放している。囲まれた庭に面して、主要居室が配置されており、庭は採光とコの字の住戸群同志のコミュニティを意識している。また、サニーサイドの初期のプロジェクトにみられる完全に4方が住戸群に囲まれた庭に比較し、庭の私物化及び放置状態にはならず、街路からの歩行者の視線を意識し、その庭は私物化されず、またメンテナンスが非常に良好なまま現在に至っている（70年程度の間）。同様な傾向は、一般の日本の住宅にも観察でき、人の通りが多く、公共の視線が適度にあるような街路に面しては、前庭を持ちしかも良く手入れがなされている住宅が発達する。街路に面する窓やテラスが特に良くしつらえられることも同様な理由とできよう（図3-8、3-9）。

生活街路 コの字の共同庭 生活街路

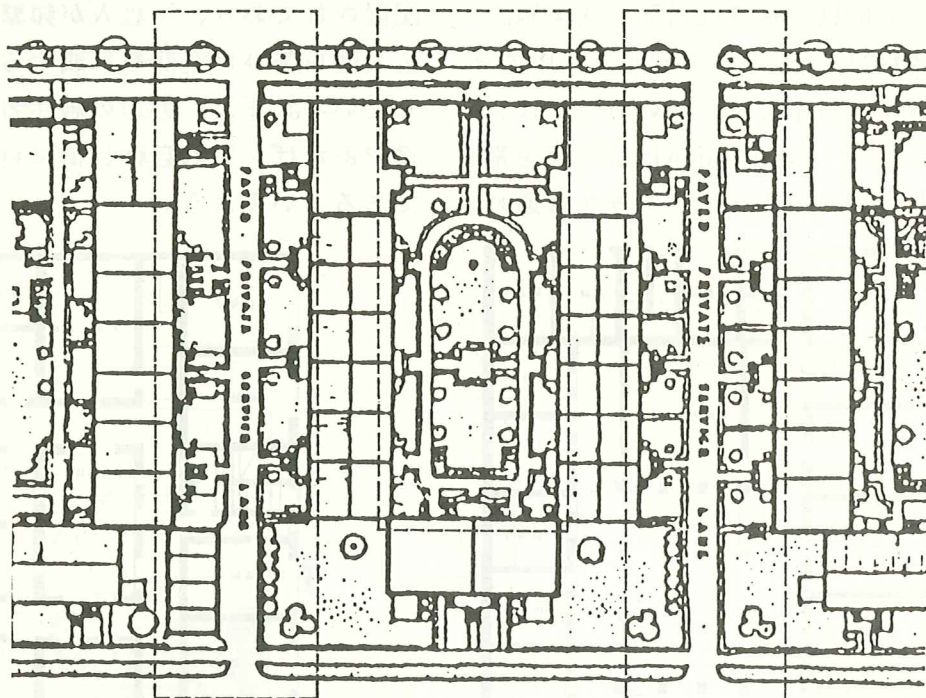


図3-8 サニーサイド・ガーデンズ（生活街路とコの字の共同庭）

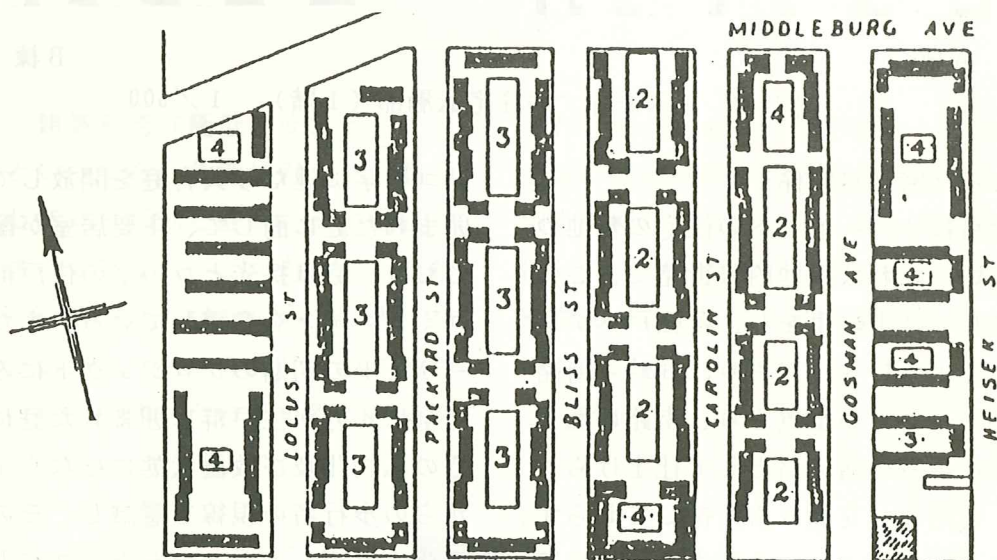


図3-9 サニーサイド・ガーデンズ（多様な共同庭の供給）

3. 住民の表現手段としての立面

街路側に対してこういった表現手段を各住戸に持たせるかは、建物ができた後の街路空間の演出に大きく関わってくる。通常の建築物は、竣工時は美しいが時が経るにつれて素材表面が朽ち、醜くなる運命を持つが、居住者がその後建物にこういった「しつらえ」を加えることが可能かが、その後の街路創出に大きく変化を与える。

⑨ 日本的な庭演出（低密度対応）

庭を手に入れることによって街路に緑を提供すると共に、庭師を入れて自分の家の豊かさやセンスなどの表現手段ともなっている。日本の緑は基本的に(1)門からアプローチし玄関に達するまでの間を意識した緑、(2)街路を通行する人々を意識した緑、(3)街路からの視線・侵入を遮断するための緑、(4)内部から眺めて楽しむための緑、の4つにその役割を分離できる。その内、主に(2)、(4)、が街路側に露出して街路との環境形成に参加することになる(図3-10)。



写真-1

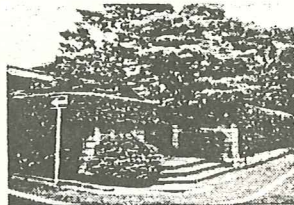


写真-2

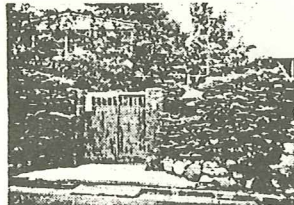


写真-3

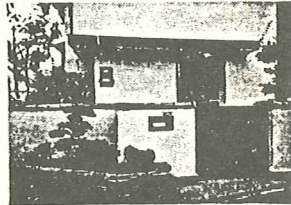


写真-4

図3-10 外部を意識した庭の「しつらえ」

⑩ 西洋的な庭演出（低～中密度対応）

西洋の戸建て住宅地では芝生の手入れが重要となっている場所が少なくはない。それが一つのマナーであり、また同様に家に豊かさや芝生を手入れすることによって街

に貢献する姿勢を見せるといった表現手段となっているとも考えられる(図3-11)。

彼らの場合は日本のそれと比較して、街路側に貢献する意識がより顕著であると思われる、日本では、囲いを立てて閉ざすことも

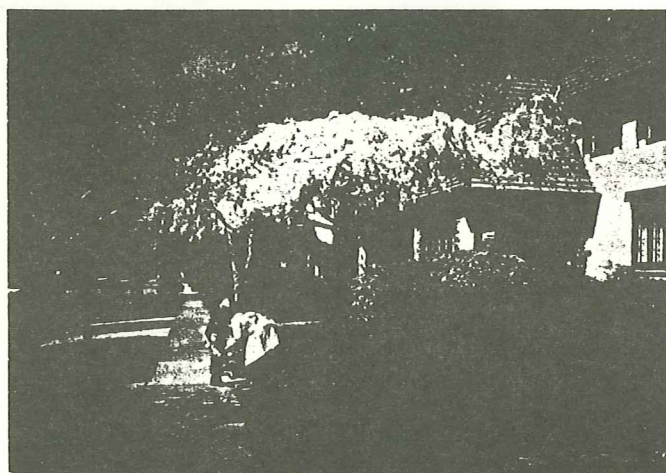


図3-11 FOREST HILLS GARDENS (アメリカ)

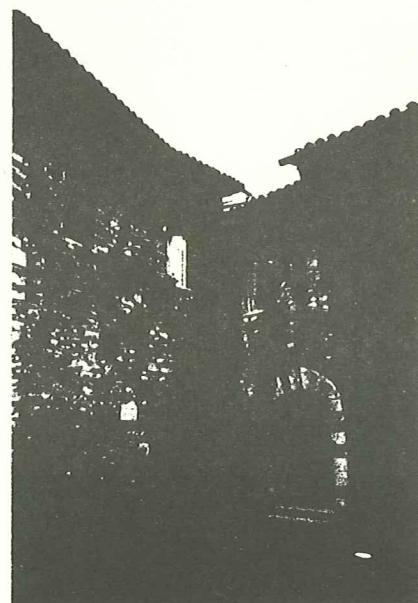


図3-12 アッシジ (イタリア)

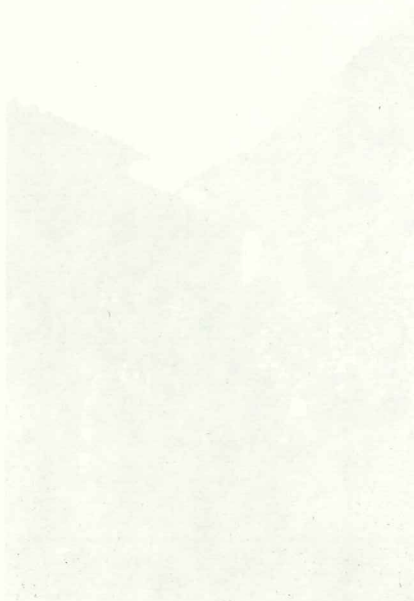
外との関係を断ち切って自分の特別性を誇示する意味を持つ場合があり、より広範囲の表現手法が許容されているように見える。

①短期的ディスプレイ演出（高密度対応又は無関係）

外部からの視線を意識して出窓や窓際に飾られる花、カーテン、小物、クリスマスなどの行事のディスプレイで、ヨーロッパの諸都市に見られる窓が連続する街並み演出には重要な位置を占めていよう（図3-12）。



図3-12



4. 閉鎖性と開放性

街路に対して開放された形態をとっているか、または閉鎖されているかは街路上の人と住戸内部の人たちのコミュニティの創出に影響を与えることは否定できない。開放するかどうかのも一つの街路に対しての「しつらえ」であり、街路空間または街を形成する上で重要なものとなる。ただし、開放されていれば常に良いといった明解な判断を下すことは不可能であり、例えば車両の交通が激しい街路に向かって開放して

いるような形態を計画することは各戸の居住環境を考慮すると間違いであろう（図3-13、3-14）。

また、時として居住者が意識してそれらを行うことがある。現代においてかつての武家屋敷のように比較的高い囲いを巡らして外部と断絶することは、自分が他と違うことの表現ともとれ、逆に開放的なつくりをする居住者も外部に対してオープンな家庭であることの表現と考えられる。

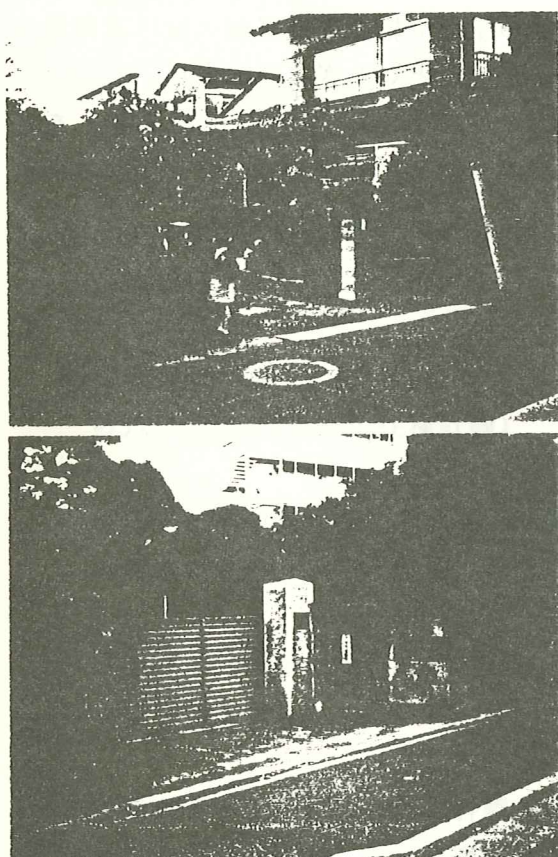


図3-13 開放・閉鎖型の庭

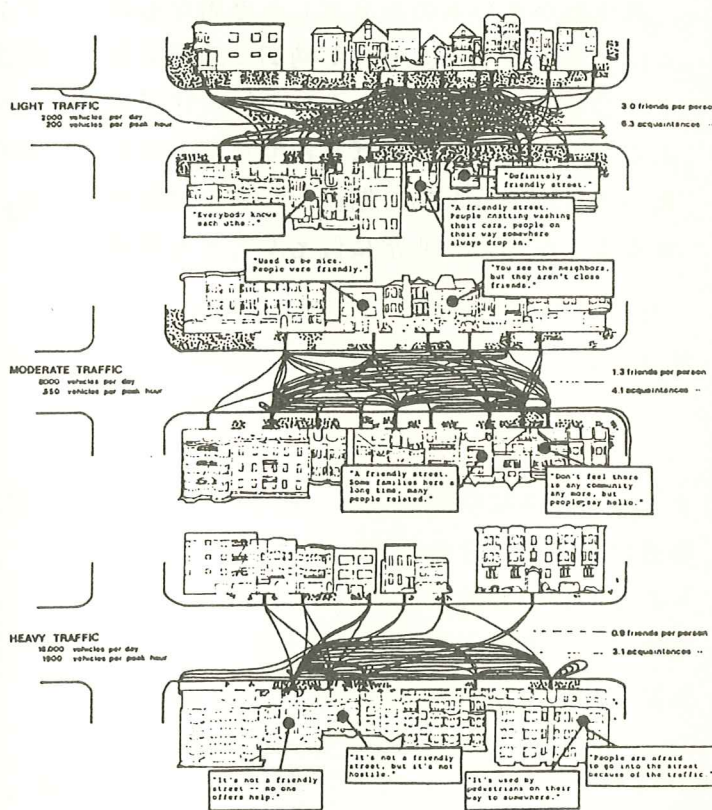


図3-14 道路と車両通行量と人の往来

以上のように、建物が街路と接する部分では、各居住者の外部に対する見栄を表現する手段としての役割を自ずと持っているが、現代日本ではその表現手段をあまりに多く持っているために必然的に乱雑な街並みを形成することになっている。そういっ

た乱雑さにある程度の方向性を持たせることが、街並みの誘導規制の役割であるが、かといって前述したように、前面の交通事情に合致しないような接し方へ収束させるような誘導は間違いといわざるを得ないだろう。

・事例と上記の「しつらえ」の有無

事例名\項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
オステアの集合住宅	○	△	×	×	×	○	×	×	×	×	△
オスマンのパリのアパート	○	○	×	×	△	×	×	△	×	×	△
サニースイト・ガーデンズ	○	○	○	△	×	×	○	○	△	○	△
同潤会代官山アパート	×	○	○	○	×	○	○	△	△	○	△
代官山ヒルサイドテラス	○	○	○	○	△	○	△	△	×	×	○
ブリック・カレッジ学生寮	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×
世田谷ビレッジ	×	×	△	△	△	×	×	○	×	×	△

- ① プライバシーの囲い込み
- ② 彫刻としての立面
- ③ 空間の提供
- ④ 街路の引き込み
- ⑤ 彫塑的な建築形態
- ⑥ 低層部の公共的施設
- ⑦ 生活街路
- ⑧ 街路に開放した共有庭
- ⑨ 日本的な庭演出
- ⑩ 西洋的な庭演出
- ⑪ 短期的ディスプレイ演出

適用数が多いものが必ずしも優秀なものとは判断できない。それが適切な適用であるか否かはその建物がおかれている状況によるからである。例えば高密度な都心部において日本的な演出を期待した庭を付随させるような場合、非常に低密度である地域

で公共の空間や施設を低層部に設ける例は間違った適用といわざるを得ない。

特定の地域で、いずれの「しつらえ」を町や街路に対して意識することが正しいかは、計画者の手に委ねられる。